

日本3大リレーイベント？

「本場北欧のリレー大会のスタイルを日本で実現させよう」というコンセプトのもと、手探りで始まったクラブカップも第8回を数え、参加する側も楽しみ方をつけてきたような感がある。今やインカレ・全日本リレーと並ぶ「日本3大リレーイベント」と呼んでもいいだろう。普段から活動をともししているクラブが戦うという点において、思い入れは全日本リレー以上のものがあるだろう。まさに地域クラブのインカレである。

このリレーイベントが他の二つと決定的に異なる点として、以下の点が挙げられる。

- 1) 制限選手ルールによって、レース展開に意図的な起伏を付けている
- 2) 走順ごとにコンセプトを明確化し、多くのレベルの選手を受け入れる
- 3) 同一クラブからの複数チームのエントリー、レース開始後の走順入れ替えなども可能

インカレや全日本リレーという競技に求められるのは「均質な実力を持つ選手がチームを組み、予想通りの高いパフォーマンスを発揮すること」であり、そこから起こる緊張感を見る者にも楽しさを与える。これに対してクラブカップでは、最初からメンバーに実力差があることを前提としている点で、「ぶっちぎりの勝利」という予想はしづらい。走順ごとのコースプロフィールを可能な限り公開し、エリート選手と年1回オリエンティアが同じクラスで遊べる楽しさもある。

そして、クラブカップをクラブカップたらしめているのが「スタート後の走順変更可」というルールである。これによって、エースを温存した状態で複数チームを走らせ、勝ち馬にエースを乗せる作戦も可能になる。

確立しつつある作戦

こんな「厳しい緊張感を離れた楽しさ」を全面に押し出してきたのが従来のクラブカップであったように思われるが、今年の入賞チームおよびメンバー、走順などを見てみると、8回目にしてクラブカップの戦い方もほぼ固まってきたように思われる。

ポイントは以下の3点である。

- 1) 制限選手は女性よりベテラン男性を使う方がよい
- 2) クラブカップと言えども1走の役割は重要
- 3) 6走・7走に固定メンバーを投入できるだけの人的余裕が必要

特に今回目立ったのは1)で、表彰台に登ったクラブカップ入賞者7×6=42人のうち、女性が4人(中村正子、宮本知江子、志村聡子、林ゆかり)しかいないという事実である。いずれも日本の女子エリートとして実績を持っている選手であるが、彼女らであっても男女混合のリレーイベントでは、Aクラスの男子と互角に渡り合う程度になってしまう。制限選手に女子を3人使わざるを得ない学生チームが地域クラブに歯が立たない最

大の理由であろう。そしてこれは、地域クラブ同士が優勝を賭けて戦う際にも重要な入選ポイントになる。

2)に関して、戦術が確立したインカレ団体戦にあっては「1走はトップから10分以内」というのがひとつの目安とされているが、クラブカップでも1走の重要性が認識された。いくら後半にエースを控えていても、追いつけるモチベーションの無い状態ではレース展開を楽しむこともできない。とは言え、トップで帰ってくる必要も無いため、ここはできれば技術のしっかりした制限選手で乗り切りたい。前述の女子選手4人のうち、3人が1走で使われているところが注目点か。

そして3)のフィニッシュ。全体のレース時間が長く、選手の実力差もあることから、この走順で抜きつ抜かれつという、一時期のインカレのような展開は考えにくい。しかし、コース距離が他の走順より長いこともあり、この走順までエースを温存できることが優勝への条件となる。このあたりの考え方は、インカレの4走に対する考え方に通じるものがある。

女子選手が活躍するには

明確なルールのもとに入念な準備をし、本番で予想通りのパフォーマンスを発揮するのがスポーツであるから、今回それを実践して見せた多摩OLは大変素晴らしい。しかし、次回以降の女子選手の活躍の機会を増やすためにも、制限選手規定には若干の見直しの余地があると思われる。

最後に、学生のOB会や同期会、世界選手権メンバーなどで構成される臨時チームがチームとしての正統性を持つかどうかは議論の分かれるところであるが、この大会は地域クラブのパフォーマンスが最も発揮しやすいように作られている。であるから、急造チームを批判する前に、クラブカップの利点を最大に生かし、この大会を、地域クラブの大きなプロモーションの場にしてはどうだろうか。

(サン・スーシ)

